は鑑定し、これは歿後の仏事を書遺した一〇ケ条のうち、「一、終焉在所事」など三ケ条のみ遺っている珍らしい文書としている。

旧目録の第十八より第二十までの雑文書の分類は、その後に文書の出入りなどあって配列など新しく考慮し大略は時代別として雑文書篇とし、明かに大乗院に関係なき文書は省き新出三点を含めて三五点に整理し一括している。「興福寺東郷氷室前関係文書」は、天治二（一一二五）年の敷地・家地の売券・譲状・直米請取状五通で、興福寺文書として最古のものに属する。永正十七（一五二〇）年と推定する三月十一日付大乗院あて三条西実隆自筆書状一幅があり、また新出の裏文面に明応二（一四九三）年とこれも推量する三月二十七日付一条冬良自筆書状を紹介している。なお、成簀堂文庫には一万点にも達するという未整理のままの近世文書があり、この調査に着手して見出された大乗院関係の中世文書六点を新出拾遺文書集の題下に補遺として収めた。

なお、番外篇として、大乗院文書以外の文書で調査の過程で瞩目した学術的資料として優れた文書三点を付録にした。「仁和寺寛性灌頂記」は南北朝時代の写本で裏文書が二五通あり、中に御子左（二条）為世自筆消息二通がある。「灌頂暦名永仁写本」は空海の灌頂暦名の鎌倉時代の写本であるが、神護寺蔵の空海筆「灌頂暦名」（草稿本とみられる）を研究するうえに好資料となろうと評価している。

本書は編著者の日本古文書学に対する造詣深い学識に即して、文書の形態寸法を詳しく示すとともに、筆蹟による書写年代を推定注記し、また諸文書間の脈絡関係など明らかにすることに努めた。旧目録に欠けていた紙背文書を裏文書として精細に調査収載した。諸文書についてその書きだしの部分を示して該文書の内容性格の一端を披陳し、学術的に重要と思われる部分や特に裏文書は努めて活字化して収載し、また図版を多くかかげている。解題中には利用者に役立つように、関係諸資料をも援用して、その見解を述べたものも少くない。前述した諸篇につき、それぞれあげた若干の例は、編著者に準拠して恣意的にその一端を選んで述べたに過ぎない。編著者は高齢ではあるが、さらに近世文書調査に着手されると聞く。その完了を期待したい。

（A五判　上五七六頁　一九八五年七月　下五三三頁　一九八七年七月　（財）石川文化事業財団お茶の水図書館　各一六〇〇〇円）

（小葉田淳　京都大学名誉教授）

京都部落史研究所編『京都の部落史』史料近代編

京都部落史研究所が刊行中の『京都の部落史』全一〇巻（編集委員は井上清・上田正昭・奈良本辰也・原田伴彦・渡部徹の五氏）は、うち第三巻より第九巻までの七巻を史料編に当てているが、その史料編の刊行も、第五巻「近世2」を残すのみとなった。予定では、史料編完結後、第一〇巻の「年表」（すでに稿本はできあがっている）、そして第一巻「前近代」・第二巻「近現代」の部落史の記述へと、進められていくことになっている。これまで、全国的な部落史関係史料集としては、部落問題研究所編『水平運動史の研究』資料編全三巻、渡部徹・秋定嘉和編『部落問題・水平運動資料集成』全五巻（三一書房）、原田伴彦・渡部・秋定編『近代部落史資料集成』全一〇巻（三一書房、刊行中）があり、また地方

別の史料集として、愛媛県・三重県などのものが存在するとはいえ、一府（あるいは都・県）単位で、古代から近代にわたって、これだけの史料集――そして年表・研究――を刊行するという企ては初めてである。部落史において京都のもっている位置というものが、こうしたことを必要とさせ、また可能にさせたことは言うまでもない。昨年、このシリーズ中の近代史料編全三巻が、完結を見たことでもあり、遅ればせながらこれらについて簡単な紹介をさせていただくことにした。

まず、各巻が扱っている時期であるが、第一巻は、一八六八年から一九〇七年まで、第二巻は一九〇八年から一九二一年まで、第三巻は一九二二年から一九四五年まで、となっている。一九〇八年を区切りとしたのには、同年の第二次桂内閣の成立、そのもとでの「戊申詔書」発布・地方改良運動開始にともなう部落改善政策の本格化という点が考えられている。もう一つの区切りである一九二二年が、全国水平社結成の年であることは言うまでもない。

次に、各巻の構成を紹介しておこう。参考までに括弧内に収録史料点数を記しておく。なお、各巻の冒頭には一三頁ほどの簡潔な「概説」が載せられており、それぞれ師岡佑行・白石正明・秋定嘉和の各氏が執筆されている。

近代一（第六巻）

近代部落問題の形成
　政治支配にみる部落問題（七三）
　法令にみる生活の諸相（四六）
解放運動の芽ばえ
　自主的改善運動の出発（六五）
　差別反対のとりくみ（五二）
生活の諸相と差別
　生活にみる部落問題（一〇〇）
　仕事にみる部落問題（七五）
　貧困とのたたかい（六三）
教育と文化の動向
　近代教育と部落（七八）
　部落改善の論議（一一）
　近代社会と信仰（七四）

近代二（第七巻）

近代部落問題の展開
　改善事業の着手と整備（七四）
　部落改善運動の展開（一〇八）
解放運動の胎動
　差別反対のとりくみ（三八）
　米騒動と部落（九四）
生活の諸相と差別
　生活にみる部落問題（五八）
　仕事にみる部落問題（七六）
　貧困とのたたかい（五六）
教育と文化の動向
　部落と教育（八六）
　部落改善の論議（三一）
　宗教と文化の諸相（六三）

近代三（第八巻）

融和行政の確立と動揺
　融和体制の整備（六二）
　融和事業の展開（七三）
　融和運動の本格化（九一）
水平社運動の成立と発展
　水平社の活動（九七）
　差別糾弾のとりくみ（四五）
　社会運動との連帯（四三）
恐慌と戦争下の生活
　生活にみる部落問題（三七）
　仕事にみる部落問題（二九）
教育と文化の動向
　部落と教育（五二）
　解放と融和の論説（一五）
　宗教と文化（五一）

以上のごとく、各巻とも四部構成となっており、それぞれが「政治・行政」「部落民自身の動き」「生活実態」「教育・文化・宗教」に対応している。そして、ここからも見て取れるように、この史料集の特徴は、「日常生活の諸相を明らかにする史料の収録に力点」が置かれていることにある。部落史の研究自体が、従来の運動中心のそれから、部落やそこに住む人々の生活を明らかにし、さらには近代社会全体との関わりで部落を位置づけようとする方向に進みつつある現状を的確に反映したものと言えよう。実際、そこに収録されている史料を通覧すれば、部落史に関する幾多のテーマが念頭に浮かんでくる。たとえば、「近代二」では、「柳原矯風会」などの改善団体、青年団組織、またトラホーム・コレラ・天然痘などの疾病・衛生問題、人力車夫や屠場などの産業・労働問題、東亜慈恵会などの医師による部落との関わり、夜学校を始めとする教育の問題、さらにそれとも関わりをもつ部落内の講の問題などなど、枚挙にいとまがない。これらのテーマのそれぞれについて、さらに掘り下げていくならば、近代部落の歴史像、さらには近代日本の社会像はこれまでになく豊かになることであろう。私もすでにこれらの史料の一部を利用させていただいたが、いまだ充分な利用とは言えない。その点では、これらの史料にもとづく第一・二巻の研究編には大きな期待を寄せている。

ところで、三巻で都合一九〇〇点余りにわたるこれらの史料は、もちろん、「収拾した史料のごく一部にすぎない」とのことである。そして、各巻末尾には採録された史料原典名が付されており、これらの史料の収集と整理には多大の労力と年月とがかけられたであろうことを推察させる。たとえば、「京都府庁文書」関係では、約二万点の行政文書の中から五年の歳月をかけて史料調査を行なったものであると言われる。そして、こうした史料をもとに、「本巻を編集するうえでの方法上の問題」として、①「地名・人名をふくめて、原則として原典に忠実に従った」こと、②「新聞記事、論説、公文書等には偏見をうかがえるものが多いが、これらも手を加えることなく載せることとした」（師岡氏概説）ことなどがあげられている。このことは、こと部落史の史料集に関する限り、極めて大きな決断を要することであるが、これによりこの史料集の価値は大きく高められていると言ってよい。この点に関して、編集責任にあたられた師岡氏は、あくまで「部落の全体を示す」ことに意義を見出され、そして、これらの史料を読み取る上で、「従来の部落史認識の枠組を越え」ることが必要であることを強調されている。こうした点に関して具体的にコメントするだけの用意はないが、いずれにしても今後この史料集が有効に利用されるならば、部落史の科学的解明とそれを通じての部落問題の解決に資することは疑いなく、またそれだけの価値をもっていると信ずるものである。

ところで、今後刊行予定の「年表」に対してひとつ希望を述べさせてもらえれば、ぜひ年表の事項と史料集収録史料との間の関連が明かとなるような便宜をはかってもらいたいことである。というのも、本史料集の構成が、先に見たように各分野別構成になっていることからして、年表の方で各史料間の継時的関連が明らかになるようにすることは、私のような怠惰な研究者の必要のためだけではなく、「だれでも読める史料集をめざして」いる本史料集の性格上

必要ではないかと思うからである。

以上、紹介というよりも感想めいたことを書き連ねてきたが、これらの史料集が、部落問題だけではなく、日本近代史全体に関心をもつ人々に読まれることを願うとともに、私自身、これからの研究の中で、本史料集をさらにつっこんだ形で利用していきたいと考えている。

（第六巻一九八四年一二月　第七巻一九八五年九月　第八巻一九八七年三月　阿吽社　各八九〇〇円）

（鈴木栄樹　京都大学研修員）

リチャード・J・エヴァンズ編
望田幸男・若原憲和訳
『ヴィルヘルム時代のドイツ――下からの社会史――』

ワルトハイム・オーストリア大統領の例を見るまでもなくナチズムという負の遺産は、とりわけ西ドイツにとっては現在もなお重くのしかかる問題でありつづけている。それゆえナチズムをドイツの歴史のなかにどう位置づけるかという問題は、ひとり歴史学界ばかりでなく、しばしば政治やマスコミを巻きこむ論争に発展してきた。最近もナチズムの相対化をめぐる、いわゆる「歴史家論争」が注目を集めているところである。

こうしたなかで一九八〇年代初めに起きたドイツ「特有の道」論争は、ドイツ近現代史をナチズムという結果と結びつけて解釈する歴史像と方法をひとつの争点とする国際的な論争であった。ドイツ史をナチズムの影からいったん解放するという、見方によってはたいへん微妙な論点を含むこの論争は、外国人研究者がその火付け役となったことでも関心を集めた。すなわちイリーとブラックボーンというイギリスの戦後世代のドイツ史家による『現代歴史叙述の神話』がそれであり、彼らの批判はヴェーラーを中心とするドイツ社会史『歴史と社会』誌派に向けられていた。

本書はこの両名を含むイギリスの若手史家が、ビスマルク退陣後のヴィルヘルムⅡ世の時代と取り組み、その再解釈をめざした論文集である。ドイツ史研究に新風を吹き込みつつある彼らの発想と方法の原点を知る上で、本書はたいそう興味深いものである。原著が出版されたのは一九七八年で、「特有の道」論争が始まる二年前にあたる。当時十人の執筆者は（本書ではこのうち八人の論文が収められている）、いずれも三〇歳前後の気鋭の研究者であった。編者のエヴァンズは、今では毎年英独社会史家のセミナーを組織し、その成果を次々と世に送りだしている社会史家として知られているが、当時はまだドイツのフェミニズム運動に関する博士論文を公刊したばかりであった。だが彼の女性史研究は、『歴史と社会』誌派を含めて西ドイツ学界の関心を呼び起こすことができず、わずかに書評一本が書かれただけであった。このすれ違いは英・独社会史の関心とアプローチの差違を見事に象徴するものであったといえる。

幸いにもエヴァンズの呼びかけに応じて書き下されたこの論集は、執筆者の予想を上回る反響を呼び、今度は西ドイツにおいても注目されるものとなった。ひとつには「下からの社会史」という鮮明な主張を掲げ、それまでのドイツ史にはない新鮮な視角とテーマを具体的に提供したのが読者の心をとらえたのであろう。もうひとつは伝統史学とは異なる立場からヴェーラーたち